

に土居の竹林繁茂するを以て、藪の内と呼へり。三壺記に、寛永八年四月十四日の火災の時、惣構の藪の内大家共延焼すとあり。按ずるに、慶長十六年九月三日利常卿在判定書に、惣構之竹、其の屋敷通之者共として可相改候。若し猥に伐取候者、屋敷主可致越度旨可申聞。と載せられたり。されば慶長十五年此の惣構堀出来せし頃より、竹の植付を命ぜられしと聞ゆ。さて此の後慶安二年四月の定書に、

一、惣構剪採竹木事。

一、同所竹子取候事。

右之外敷條を載せたり。又萬治二年十一月普請奉行への定書に、惣構之竹笹切あらし不申様、切々人を廻し念を入可申付。竹巻之事は如跡々町夫可申付。とありて、普請會所より裁許せしかど、寛文元年より金澤町會所の附屬と成るに依つて、惣構肝煎として町役人を立て、惣構堀竹木等の事をば裁許せしめたり。按ずるに、藪の内と呼べるを、竹叢の事とするは後世の俗言なるべし。惣國但馬風土記に、往昔無民家。而竹藪耳。故云藪。とあるも、後世の風土記なる故なり。和名抄に。呂氏春秋曰。澤無水曰藪。和名也不。

とあり。和訓栞にやぶは彌生の義なるべし。日本紀の歌にやぶはらともいへり。仙覺抄にやぶは水つきてあしなどしげれる所をいふ。俗にやはらといふといへり。されば此の金澤惣構堀の藪の内といふも、竹叢のみならず荆棘の繁生して、澤水のはびこれる草原なるに依つて呼べるならば、説文に藪大澤也とある本義に叶へりといふべし。

○高島石見守藪邸

石浦町藪の内、今福念寺と云ふ道場の地より、尻地は右衛門橋の邊まで、昔は一區域の地にて、高島氏の藪邸なりといひ傳へたり。高島氏は、家祿一萬七千石を領しけるを、慶長五年祿を辭して京都へ退去す。其の子五郎兵衛家を繼ぐといへども、繼に千五百石を賜はりけるに依つて、邸地は多分引揚げられ、諸士の邸地と成る。五郎兵衛の子孫世々此の地に居住し、明治十三年眞宗道場福念寺へ譲り、此の地を退去せり。是其の藪邸の遺蹟なり。

○報恩寺櫻

高島五郎兵衛の邸跡、今の福念寺の露地にあり。高島氏の傳説に云ふ。元祖石見守定吉此の地に居住の頃、京都報恩

寺の實生を取寄せて、植ゑられけるにより、報恩寺の櫻と稱し、名木の櫻にて甚だ老樹なりといひ傳へたり。其の花一重の大輪にて、香氣甚だ高く、花容見事なり。依つて藪中は、毎春花盛の頃城中へ獻するを例とす。近年古木は枯れたれど、實生今に數樹ありといへり。又云ふ。五郎兵衛は石見守の舊邸なる家屋を割家となし、夫れより子孫世々居住し、寶曆九年四月の大火にも延焼を遁れたり。されば石見守の建物の残りたるが、維新の際まで三百年に近く存したる古家にて、庭内もそのかみよりの遺木共其の儘残れるに依つて、報恩寺櫻などもありけるなりと云傳へたり。

○高島石見守定吉傳

高島氏の元祖は、鎌倉の住士前田右衛門吉雄と云ひ、享徳二年に歿す。其の子を高島左京大夫吉邦といふ。尾州斯波家に隨從し、文明九年に歿す。其の子を高島左京大夫直吉と云ひ、織田家に隨從し、文龜元年に歿す。其の子を高島左門吉光と云ひ、信長公に仕へ、天文十七年に歿せり。其の子即ち石見守定吉なりと、高島五郎兵衛家譜にあり。一

書に云ふ。高島左京大夫は、尾張國山田郡高島の城主にて、織田家に隨身す。其の子も左京大夫と云ふ。此の人に六子あり。長男を左門と云ふ。長女は利家卿の小君芳春夫人なり。左門の長男を織部と云ひ、石見守定吉是なりと。三州志隄叢餘考にいへり。定吉は、天文七年尾州山田郡高島にて出生、幼名を孫十郎と稱し、長じて織部と云ふ。天文十七年父左門吉光歿して、家を繼ぎ、利家卿の御妹姫と成りて、奉仕す。天正三年利家卿越前府中入城の時八百石を賜はり、後戦功に依つて追々加恩せられ、一萬七千石を領知す。天正十一年加州石川・河北二郡利家卿の封内と成るに付き、石川郡鶴來城を預けられ守護す。翌十二年能州末森の軍役に付き、七尾城を兼守せしめられ、同十四年越中新川郡預り領と成るに依つて、宮崎城を兼守せしめらる。文祿三年叙爵を命ぜられ、從五位下石見守を拜任す。慶長五年大聖寺城攻の時、金澤城の留守を命ぜらる。後故ありて、家祿を辭し、名を無山と稱し上京して、慶長八年正月三日京都に卒す。享年六十六歳。或は云ふ。定吉祿を辭し上京せしは故ある事也。關原合戦の頃、利長卿關東徳川家に